

地と人にこだわる地域づくりの可能性－鹿児島との再会に思う－

國學院大學教授 橋元 秀一

昨年8月より、鹿児島国際大学地域総合研究所に受け入れていただき、本務校よりの派遣研究に従事している。研究テーマは、「鹿児島地域における経済と雇用の現状および地域振興政策に関する調査研究」である。中村哲所長をはじめ関係の方々のご厚意を賜り、深く感謝申し上げたい。

なぜ、鹿児島か

日本経済は長引く低迷の中で新たな構造転換に迫られて久しい。少子高齢化が進展し産業空洞化が懸念される中、地方分権がめざされ、「三位一体改革」や市町村合併が進められている。日本経済の具体的実体をなす地域経済は、いったい今後どうなっていくのか、どのような改革が必要とされているのだろうか。県土に占める過疎地率が全国でも高水準となっている鹿児島県を事例として、地域の経済構造と雇用問題の現状および直面している課題を明らかにし、地域振興政策のあり方を検討したいと考えている。

事例に鹿児島県を採り上げたのは、過疎地率にみられるような困難の大きさ、財政危機をはじめとする事態の深刻さ、旧来の中央主導政策への依存度の高さなど、抱える問題状況の特徴が、地域問題の典型とも言える形相を呈しているからである。が、これは公式見解。テーマへの思いは深いが単純だ。鹿児島は、私の生まれ育った地であったからである。

そこにはさまざまな思いが込められているが、1つだけ述べておこう。現在、我々は、日本の近代化が前提とした諸条件が根底から掘り崩されつつある地点に立っている。少子高齢化は言うまでもないが、既に標準的家族なるものは崩壊し、1人世帯と2人世帯とで

過半数を占める。賃金や働き方など雇用のあり方は流動化多様化し、生活保障を前提とした雇用が一般的とは言えなくなっている。こうした状況は、グローバル化や競争の激化といった経済的な要因、IT化などの技術的要因、環境問題の深刻化などの諸要因によって生じているばかりではない。良くも悪くも、近代化の果てに人々の意識や生活スタイルの変化としても生じている。それは、言わば日本の経済社会の成り立ち様が変質し、編成原理が根本的に揺らいでいると言って良い。ニート（職に就かず学校にも所属せず、求職のための活動もしていない若者のこと）の存在はそれを象徴する。では、日本はどこへ行こうとしているのか。ある人はアメリカ型社会を、ある人はかつての日本社会をめざし、そして多くの人是不満と模索の中にあるように思われる。私もまた模索の中にいるが、その手がかりを、故郷である鹿児島に求めたのだ。それは幼い原体験へのノスタルジーと言えるのかもしれない。しかし、鹿児島はかつて近代化を主導した多くの人材を輩出しながら、他方でそれに乗り切れずにきた地である。そうなった要因には、不利な諸条件を多く抱えていたこともあるが、近代化やその後の経済成長に乗らなかった故の要因も伏在しているのではないかとの思いがある。それが何である

のかは、いまだ判然としない。地と人（関係を含め）へこだわる営みの内に何かがあるように感じているにすぎない。そして、そこに手がかりを見いだせるのではないかとの思いを抱いているのである。

32年ぶりの鹿児島滞在で感じること

調査研究は緒に着いたばかりで、内容あることを申し上げることはできない。32年ぶりに住んでみて感じていることを、とりとめもなく記すことをお許し願いたい。

私が18歳で鹿児島を離れたのは、1973年である。そのときの人口は、県が172万人、鹿児島市が39万人であった。現在はそれぞれ178万人、55万人（合併前）であることからすれば、ともかくも発展してきたということであろう。ただ、当時は市部と郡部の人口がほぼ半々であったが、現在は、市部が104万人と増加したのに対し、郡部は74万人へと大きく減少している。鹿児島市への一極集中化が歴然と示されている。

鹿児島市の市街地は、観光都市として美しく整備されてきたが、同時に都市の形相を呈している。しかも、かつての田舎の都市ではなく、大都市圏にある都市の形相である。流行の店や全国チェーンの店舗のほとんどが立地し、24時間営業のインターネットカフェがいくつもある。この限りでは大都市圏の動向との時間差も非常に縮まっている。鹿児島市は、都市生活の利便性を十分に享受できる街になった。川内、鹿屋、指宿などの市部や加治木・隼人なども、ロードサイド店中心ではあるが関東圏とほぼ同等の利便性が整備されている印象を持った。

公共施設は、大都市部よりも充実している。とりわけ低料金温泉施設が各地にあり、スポーツ施設や会館さらには観光施設など、よく整備されている。これらの便宜を供与する施設の集積度からすれば、もちろん大都市部には

及ばない。しかし、大都市部では人口が多く、しかも民間企業によってその多くが提供されていることもあって、利用が難しくかつ料金が高い。それゆえ、これらの便宜を上手に利用する人からすれば、「田舎ライフ、バンザイ」となる。その意味では、「鹿児島ライフ、最高」と言って良いかもしれない。

産業面で見れば、現下の焼酎ブームに示されるごとく、鹿児島産品のブランド化に成功してきた。お茶、地鶏、黒豚など、順次広がりを見せている。その影響か、東京有楽町の遊楽館の夕方以降は、いつも混んでいるという印象だ。鹿児島産品を提供する飲食店は大都市部では増えているのではないだろうか。電機産業の集積も、国分隼人地区を中心に進展した。近年は停滞状況にあるとは言え、かつてを思えば目を見張る。希有の自然的景観や温泉、歴史・史跡などを資源とした観光客誘致の取り組みもずいぶん進んできた。新幹線開業を追い風にするべく、ますます積極的に推進しようとしている。

何が問題か

こうしてみると、鹿児島は着実に整備され発展してきた。気にかかるのは、離島を含む郡部との格差が広がってしまっているのではないか、ということだ。屋久島の事例に見られる新たな発展可能性も一般化は困難だ。郡部における問題状況は、かなり深刻なものだろう。また、発展を支えてきた自治体の財政問題の深刻さは言うまでもない。

しかし、いっそう深刻だと考えさせられるシーンに出くわした。アミュプラザ開業時のTVニュースで流された駅前でのインタビューである。年齢を問わず多くの人たちが、「これでやっと鹿児島も都市になった」といった意見を表明していた。私には衝撃的であった。依然として大都市部と同等の利便性を求め続ける姿を目の当たりにしたからである。そう

した欲求は当然のことなのだろうが、どこまでそれを求めるのか、大都市と同じになればいいのか、大都市でないからこそその鹿児島の良さは不要なのか；という思いに駆られた。

実は、起きている現象は、渋谷と同じである。本務校が渋谷に立地していることもあって、國學院大學渋谷学研究会において渋谷エコノミーを私は担当している。1970年代以降、DCブランドを生み出した小規模零細企業の集積を背景に、渋谷はファッションの情報発信基地となった。新しい文化を創造する若者の街として、渋谷は広く知られている。遠方からの集客力が高まるに伴って、大手アパレル店や各種の大手小売業が集積するようになり、全国チェーンの飲食店さらに家電量販店までが押し寄せた。最近では、世界的ファッションブランドも進出している。こうして、渋谷は情報発信基地から情報発信舞台へと変質してしまった。発信する情報は外の大手企業で創られ、全国展開への舞台である渋谷に持ち込まれる。渋谷の個性は空洞化し、単なる大都市の一つにすぎなくなってきており、子供たちに「占拠」された表通りでない商店街の沈滞は深刻化している。危機感をもった東急は「大人の街」づくりに取り組み、渋谷区も再開発プロジェクトを進めつつある。

より利便性の高い都市化とは、ともすれば個性のないミニ東京化に陥りがちである。そうした事例は全国で数多く見られる。既にこうしたことは理解され、街づくりを進める側では個性ある展開を図ろうと努力していよう。しかし、住民の意識において、上述のシーンに象徴される「都市化へのあこがれ」「消費生活至上主義」とでも言うべき意識は、依然根深い。こうした状況の対極にあるのが、島唄を歌いエイサーを踊る沖縄の若者たちの姿である。沖縄は沖縄で深刻な問題を数多く抱えているが、それにもかかわらず沖縄の地にこだわりその文化を大切に楽しむことが、若

者の間でも自然なことのように思われる。鹿児島の良さを自覚しそれを活かし楽しむ街づくり・地域づくりこそ大切であろうが、そうしたこだわりが広く共有され具体化されていくにはまだまだ時間が必要なのだろうか。

鹿児島の良さが自覚されにくいという問題に目を向ける必要もあるのかもしれない。自然的条件は当たり前のことで、問題点ばかりに目が向きがちである。高い水準にある公共施設の利用も恵まれたこととは認識されていなかったり、せっかくの施設が知られておらず、交通面や運営面での使い勝手の悪さもあり活用されていないといった状況もあるのではないか。要するに、宝が宝と自覚されず、かつ宝の持ち腐れもおこっているのではないかと思われる。さらに言えば、鹿児島は、幕末・明治維新史においてばかりでなく、古代史以来の歴史的資源においてまさに豊饒の地である*が、これも十分に活かされていない。

地元紙を見ると、いろいろ地道な営みにあふれている。幸いなことに、県下の公的部門や民間企業で活躍している友人も多く、彼らから多くの助言と示唆をいただきつつある。穎娃や霧島の主婦たちが地元食材にこだわった飲食店を立ち上げ、地域おこしを担っている話も友人から聞いた。地と人にこだわる取り組みは、脈々と受け継がれ、新たな動きを見せ始めているようにも思われる。そこには、目立たずとも自分のいつくしむ地で人との関係を築きながら格闘する姿があるに違いない。そうした人々の善良な営みが地域を動かし、行政とも効果的に連動していくことを願っている。今後の調査が大変楽しみである。

* 萩原雄二郎「諸国人物志／鹿児島県」上中下（『歴史と旅』平成4年1～3月号、秋田書店）を参照されたい。